

美しさを伝える世界遺産：持続可能な発展

齋藤, 正己 / SAITO, Masami

(出版者 / Publisher)

法学志林協会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法学志林 / 法学志林

(巻 / Volume)

112

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

13

(終了ページ / End Page)

21

(発行年 / Year)

2014-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010789>

美しさを伝える世界遺産

——持続可能な発展——

齋藤 正 己

一 世界遺産・維持管理の危機

我が国が直面する最大の課題は、少子高齢化が進行しながら、極端な人口減少社会を迎え、二二〇〇年には現在の人口の三分の一まで減少する推計がされていることである。特に地方都市の過疎化は一段と速度を速め、過疎化のもたらす問題について、土地制度の専門家である五十嵐は、過疎化の危険性とは集落の崩壊、社会の安全性や、人々とのつながりが崩壊し、社会の根底が失われていく過程であることを指摘している。

この深刻な問題は「世界遺産」の分野でも大いに問題になっている。世界遺産はそこに登録されることによって、ある種の名譽を得ることができる。最も大きな意味ではそれ事態「平和」に貢献する、という偉大な役割を持つものであるが、それと同時にそれを永遠に維持していくためにどうしたら良いかという「宿題」が課せられるのである。当初その維持管理にとって「戦争」による破壊が問題視されていたが、破壊は戦争だけでなく、実は津波、地震、火

災などの災害によってもたらされている。そのため各国ともこれらに対するもろもろの対策を講じてきているが、最近ではそれに加えてさらに「過疎化」あるいは「貧困」による放置なども顕在化するようになってきたのである。このような事態を迎えてユネスコも危機感を覚え、二〇一二年京都において開催されたユネスコ総会で「持続可能性を持った世界遺産の管理の適任者は、地域住民にある。また、その利益の享受者も地域住民である」(京都ビジョン)と宣言した。ここには世界遺産の現代的な課題が明瞭に示されている。

いくつかその論点を示しておきたい。

一つは、「その課題を背負うのは誰か」という主体の問題である。日本でいうとこれまで世界遺産はもっぱらず国(特に文化庁)が担当し、国から自治体に指令が降り、次に地域住民に伝わる、というものであった。もう一つは維持管理の手段として、文化財保護法による国宝あるいは名勝・史跡の指定といったように法律によってこれを保護していくという方法である。五十嵐は高野山で「美と祈り」の研究過程で世界遺産に登録されている高野山の過疎をつぶさに見ながら、このままでは世界遺産は維持できないとし、東京大学の教授で日本イコモス国内委員会会長(現)をしている西村幸夫教授(のちにユネスコ元事務局長松浦晃一郎、自然遺産の権威で東京大学名誉教授岩槻邦夫も参加)に呼びかけ、市民の側から世界遺産を見するという活動を活発に行うようになった⁽¹⁾。

本稿ではこのような業績を踏まえながら観光と維持管理という視点より、この論点を深く掘り下げていきたい。

観光業と維持管理

ユネスコが指摘する「コミュニティの強化」を宣言した背景には、見たように世界遺産が戦争や災害だけでなく「過疎化」や「貧困」がある。とりあえず、この点についてダイレクトにかかわる解決法の一つは「観光」であると

いうことは、日本でも世界遺産に登録されるたびに「観光客」の増大の報道によって明らかである。

これまで登録された我が国の世界遺産は、現在一八件²⁾が登録されているが、京都など都市部に所在するものを除くと、ほとんどが地方都市に存在している。これらの地方都市は、我が国の人口減少社会の最先端をいく地域であり、地元の雇用と経済を守っていく方法として観光業は有効な手段なのである。

二 世界遺産が地域に与える恩恵―観光業

そこでまずこの過疎について、次の表を見ておきたい。

これは世界遺産登録都市を文化遺産と自然遺産に分け、二〇四〇年までの人口の推移と高齢化率を見たものである。これを見るとき、いずれの地域も急激に人口が減少し、また高齢化が進むことは明白である。このような地域で観光がどのような位置を占めているか、およそ想像がつくが典型的な例として、ここではすでに世界遺産に登録されている白川郷とこれから世界遺産登録を目指す沖縄県南西諸島を見ていきたい。

岐阜県と富山県の白山水系と飛騨川水系の源流に位置する白川郷は三つの集落からなる。江戸時代から養蚕業が中心で有り、合掌造りの民家の特徴の村であった。しかし日本の「近代化」とともに養蚕業の衰退により人口減少が起こり、集落の消滅の危機につながった。廃村が相次ぎ、合掌造りの民家も最盛期と言われた一九世紀の一〇分の一にまで減少した。現在では二〇〇〇名以下の山村である。そのため伝統的家屋である合掌造りを維持していくことが困難になっていった。しかし、その特徴ある合掌造りが一九九五年に世界遺産に登録され、地域全体に変化が起こった。観光客の増加である。観光収入の増加は合掌造りの民家の保存の資金的基盤になり、家屋の修繕や茅葺き屋根の葺き

白川村及び鹿児島県・沖縄県の世界遺産登録市町村と
暫定リスト搭載予定市町村の将来推計人口一覧

白川郷	白川村	1,733	1,671	1,618	1,569	1,503	1,447	1,398
		28.9			32.8			32.6
	南砺市	54,724	51,454	48,214	44,863	41,491	38,178	34,857
		31.1			40.5			43.9
屋久島	屋久島町	13,589	13,280	12,883	12,436	11,981	11,518	11,058
		28.0			35.5			35.8
琉球のグスク	今帰仁村	9,257	9,047	8,811	8,563	8,301	8,024	7,719
		26.5			36.8			39.4
	読谷村	38,200	38,661	38,849	38,729	38,430	38,020	37,412
		16.7			24.0			30.2
	中城村	17,680	18,228	18,569	18,798	18,918	18,967	18,872
		16.6			24.5			30.5
	北中城村	15,951	16,039	16,012	15,890	15,696	15,450	15,155
		20.2			29.8			37.1
	東村	1,794	1,711	1,624	1,542	1,458	1,369	1,276
		25.8			38.1			41.4
	大宜味村	3,221	3,030	2,856	2,685	2,529	2,369	2,202
		30.8			44.4			45.6
	国頭村	5,188	4,901	4,623	4,359	4,111	3,687	3,610
		27.5			38.3			42.2
奄美・琉球	奄美大島市	46,121	43,284	40,796	38,223	35,693	33,203	30,775
		25.8			36.8			42.3
	徳之島町	12,090	11,398	10,762	10,138	9,552	9,008	8,466
		27.2			35.3			33.9
	竹富町	3,859	3,679	3,494	3,303	3,111	2,938	2,746
		20.6			33.7			43.3

出典：国立社会保障人口問題研究所、日本の地域別将来推計人口、2010 年データより筆者作成
西暦 2040 年までのデータをもとに人口と高齢化率の予想である

注 (1) 単位は上段が人口を表す人で、下段は将来推計人口に基づく高齢化率を%で表している

(2) 屋久島は鹿児島県屋久島町所在の世界遺産で 1993 年に世界遺産に登録されている

(3) 沖縄県所在で 2000 年に登録されているのが「琉球王国のグスク及び関連遺跡群」として登録されている

沖縄本島に広く分布している

(4) 奄美・琉球は現在世界遺産登録の前段である国内暫定リストへの搭載を目指している

(5) 白川郷の登録世界遺産は岐阜県と富山県にまたがっている

替えも行われた。また、歴史的建造物の保存に関して消火栓や放水銃が各集落にきめ細かく配置されるようになり、保存が強化できるようになった。

一九七〇年代の観光ブームから俄かに脚光を浴びつつあった白川郷であるが、それまでの年間の観光客数は五〇万人前後であった。合掌造りの民家はテレビ等でもしきりに映像が映し出されるようになり、世界遺産登録後は観光客数の増加が顕著となり二〇〇八年には年間一八〇万人を超え、二〇〇万人台に迫る勢いになった。

この意味では世界遺産登録は絶大な効果を発揮したといえよう。

もうひとつの例として、世界遺産の登録のための暫定リスト入りを目指している沖縄県の南西諸島にある西表島を紹介しておきたい。

西表島は一九六七年に固有種として確認されたイリオモテヤマネコの生存する島として有名であり、島全体を取り囲むサンゴ礁などの自然景観と希少生物の多い島であった。一九四五年の敗戦を契機として戦後は長い間アメリカの施政下であり、一九七二年に本土復帰を果たしたが、南西諸島全体はほとんどの地域が半分近くまで人口減少していたが、一九九〇年代からはじまる沖縄ブームによって美しいサンゴ礁と生き物たちに会うことができる観光の島として脚光を浴びるようになった。

西表島の観光の特色は、島全体のおよそ九〇％が原生林に覆われたジャングルで、そのジャングルにはイリオモテヤマネコが住み、大空をカムリワシが舞うという自然を満喫できるところにある。

こうした美しい自然が売りものであるが、観光客の増加（年間一〇〇万人）によってホテルの開業があり、農地の開拓による自然破壊が進んだ。それによって、サンゴの死滅が起こり、また絶滅危惧種であるイリオモテヤマネコの生育環境が危機に瀕する状況が起こった。

地元では野生生物保護センターを中心に環境保護に努めている。しかし世界遺産の暫定リスト入りを目指す中で、地元住民の間にもこれまで認識してこなかった優れた自然環境を人類の普遍的な遺産として保護すべきものとして見直す機運が生まれた。

西表島を中心とする竹富町は島ごとに特徴を持っている。竹富町を訪れる観光客を西表島と二分する竹富島は、重要伝統的建造物群保存地区として沖縄県の民家の特徴である石垣に囲まれた赤い琉球瓦の民家の佇まいが、島民の手によって今も守られている。制度として竹富町には景観条例が作られているが、日々の生活に根ざした環境を何よりも島民自身が大切に受け入れていることである。これからも島の景観は島民自身の手によって守られ続けることであろう。

三 観光業に対する警鐘

然し、一見この効果絶大でしかも唯一の切り札である観光業にも周知のように多くの問題がある。

白川郷について検証してみよう。世界遺産への登録以前の観光客数は白川村の統計ではピークの時で年間約六〇万人であった。しかし道路インフラの整備に伴って、東海北陸自動車道の開通により観光客数は、約二〇〇万人近くまで膨れ上がり、集落周辺には一年中車両が溢れ、人が溢れて結果として観光地の魅力を軽減している。またそれは地域住民の生活を一変させている。白川郷の産業構造は既に観光業への傾斜が大きくなり、養蚕や農林業などの伝統産業はほとんど姿を消し、農地の耕作放棄、転用が後を絶たない。白川郷では合掌造りの民家を保存するために、「売らない、貸さない、こわさない」を合言葉としているため、新規参入が難しい。そのため後継者不足が深刻な問題と

なっている。

では西表島はどうだろうか。現在の西表島の観光は、サンゴ礁の海を求めるダイバーが主力である。ダイビングはポイントであるサンゴ礁まで行き、そこでアンカーを下ろしてダイバーがサンゴ礁めがけて海を堪能する。そのためアンカーがサンゴに掛かって破壊することが問題になっている。また観光客の増加に伴いインフラ整備が追いつかず水質汚染が起きている。

世界遺産を目指すためにはある程度の人数を収容できる宿泊施設も必要となる。この需要をみこんで東京の業者がホテル建設を決行し、これを巡って地域住民が反対派と推進派に分かれ、訴訟が提起されるという事態が起きている。

また西表島もオーバーユースの課題を既に抱えている。西表島のもう一つの観光の目玉は、豊富な水系を利用したカヌーである。カヌーで川を遡り、途中から山歩きをしながら源流の滝を目指す。しかし西表島の山の歩道はほとんど未整備の状態である。そのような状態のところを観光客が踏み荒らし生物の生育環境に影響を与えている。交通事故によるイリオモテヤマネコやその他の希少生物の死滅が後を絶たない。

四 市民力と持続可能性

冒頭に見たユネスコのコミュニティ重視の宣言は、五十嵐が鋭くしてきたように、世界遺産は今やそれぞれの国の「独占物」ではなくなってきた。観光業は多くの衰退する地域にとって魅力的なものである、これは世界遺産登録地域でも同様であり、世界遺産登録はそのための絶大な切り札となっているといっていよう。しかし、観光業

は恒久的な対策かという疑問も多い。観光は主として、国や自治体ではなく、地元業者を含む民間事業者によって行われる。しかもこの観光の質量をコントロールする直接的な法律は存在しない。そこで地域住民は構成資産や構成資産を守るためのバッファゾーンを維持するために、オーバーユースなどに対する的確な誘導を行わなければならない。また一方で自らの生計を維持しかつ後継者を育てるために適切な経済を確保しなければならない。これをどのように両立させるか、ここでは当該地域に即した「市民力」が試されているといえよう。そして実は日本にはこの市民力、言い換えればコミュニティを支える重要で本質的な知恵と行動が存在していた。それが白川郷及び西表島に見られる「結い」⁽⁴⁾である。これは個人が一人ひとり独立して家屋や環境を守るというものではなく、地域住民の共同作業によって屋根葺き日常の生活を支え合う力が存在しているのである。

西表島では、離島地域が抱えている共通の課題である海岸の漂着ゴミの除去作業を島民と集落の住民が全てを担っている。農業の現場においてはいち早く集落共同の作業が実践されている。集落の力が弱くなっていることが指摘される中で、西表島ではこうした伝統が今も地域を支える基盤として受け継がれているのである。

その根底にあるものは地域住民の信頼関係であり、それが絆となってお金や労働力あるいは知恵・技術を出し合い、地域コミュニティを守っているのである。現代の観光にも実はこの結いの思想が求められているのではないか。つまり観光客はただ当該地域の神社仏閣、家屋あるいは自然を堪能するというだけでなく、この地域の維持保存に自らも参加する責任がある。参加の形態としては自ら労働力を提供するといったことのほか、地域を維持するための資金、技術あるいは知恵を提供する。さらには観光に必要な魅力的な商品を作り出し、これを宣伝する。またこのような観光に直結する作業だけでなく、仕事に忙しい両親にかわって子供教育を行う、介護を手伝うなどということもあろう。つまりこれは地域住民と観光客の結いというようなものであり、これはまた五十嵐のいう「現代総有」と通じるもの

があるのではないか。ユネスコの言うコミュニティ重視という宣言はこのような現代総有と通底することによってはじめて生き生きとした生命力をもつということを知らねばならないのである。

(1) 『私たちの世界遺産―、持続可能な美しい地域づくり』(二〇〇七) 公人の友社を五十嵐・岩槻・西村・松浦の四名での出版を皮切りに、毎年世界遺産に関する提言を行い、現在、日本の城に関して本年二月に松本市においてフォーラムを開催。ブックエンド社より『日本の城・再発見』を出版している。

(2) 昨年の富士山を含めた数字。

(3) ユニマットグループが建設を行い、現在は星野リゾートに譲渡されている。

(4) 沖縄ではユイマールと呼ばれている。